

CODEGEASS See you again

ブリタニア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コードギアスR2のその後のお話 ネタバレ

ゼロレクイエム

ルルーシュは死んだのか

C・Cはどうなったのか

ゼロのその後

目次

悪逆皇帝死す・・・	1
死人の復活！前編	4
死人の復活！後編	7
病は人間だから	10
民衆の声	13
兄弟の絆	16

悪逆皇帝死す……

「世界を壊し…世界を…つく…る」

悪逆皇帝ルルーシユが死んだ

その瞬間を目撃していた民衆は彼を殺した者の名を何度も繰り返す呼ぶ。

悪逆皇帝の死を喜ぶ民衆たちの中だったが唯一彼の死を一番近くで見ているナナリー・ヴィ・ブリタニアだけが涙を流していた。

「ウア~~~~」

彼女の所にゼロが、やって来た。

「ナナリー、ルルーシユを連れて行くよ。いいね」

とゼロはひざを付きながら言ったそれに対して彼女は涙を拭きゼロを見て。

「はい、お兄様をお願いします」

子供であれば、泣いて離れたくないだろう。

しかし、彼女は落ち着いていた。こうしていたら、悪逆皇帝である彼がどうなるか想像ついているからだ。

「いい子だねナナリー」

「ですが、私を迎えに絶対に来て下さい」

「うん」

ルルーシユの体を持ち上げてゼロは来た道を民衆の間をくぐり抜けて戻って行き完全に民衆から離れた所で

「ゼロ！」

後ろから名を呼ばれた。

その声に立ち止まり振り返った

「なんだカレン」

「ゼロ、いや、スザクお願いがあるの」

「……」

「ルルーシユを連れていくんだったら私も連れて行って！

お願い！」

「……わかってるだろ。カレン」

「・・・やっぱり、ダメよね、ごめんなさい。でもお墓の場所ぐらいは後で教えてよね」

そういつて彼女は、来た道に戻っていった。

彼も行くべき場所に向かった

『カレンは、ルルーシユのことが本当に好きなんだね』

蜃気楼を隠してあるところまで走り彼は乗り込み飛び去って行った。

教会へ向かった。

「C・C、あとは頼む」

彼は、ルルーシユを教会内の十字架の下の棺桶に寝かせナナリーを迎えに行った。

C・Cは、

「お前は本当に嬉しそうだな。

・・・ルルーシユ、お前は、よく今まで仮面を被って生きていたな。

それで、お前は、幸せであつたろう。

・・・だが、私は、これからまた一人になってしまわないか。

私は・・・私は、これからまたどうしたらいいのだ」

・・・

「ハハハ、すまないルルーシユ。

最期は笑ってお別れしたかったのにな、

・・・どうしてだろうな！

涙が止まらないな。

まだこんな感情もあつたのだな」

彼女は必死に涙を拭き笑顔を見せた。

「・・・ルルーシユ、お前を愛しているぞ」

彼にキスをした。

そして彼女はその場から立ち去るため扉までむかった。

「C・C」

自分と呼ぶ声がした。しかし振り向いても何もいなかった。

「・・・気のせいか」

彼女は外に出ようとした

「C・C」

また自分が呼ばれる声があった

だが周りを見回しても誰もいない

「なんだ？」

誰がいるような気配があった。

彼女は彼の棺桶がある方へ歩き出した。

「誰かいるのか。いるのなら返事をしろ」

・・・

返事はなかった。

彼女は、周りを見回しながら

「おい、誰だ」

「だくれだ」

という声とともに彼女の目の前が真っ暗になった

「?!」

続く

死人の復活！前編

目を覆う手を振りはらった

「C・C！また会えて嬉しいよ。元気そうだよかったよ。」

「お前は！」

振り返った先にいたのはマオだった。

「お前は死んだはず」

「そうだよ！僕は君に殺されたよ。でもね！僕は、この通りさ！」

と両腕を上げ一回りした

「僕はね！君と一緒に居られる最高のひと時をすごすまでね。僕は、死ねないよ！」

「ありえない。私は確かにお前の頭を撃った、……まさか！不老不死の力を!!？」

長い間その力で生きてきたが彼女はすべてを理解してるわけではなかった。

不老不死になるには、不老不死である者から受け取る事しかさずからないと思われていた。

だが

ここに彼は存在する

「そうだよ、C・C、僕も君と同じになれたんだ。嬉しいよ、これで君とずくとそばで生きていける。なんて素晴らしいんだ！最高だよ！C・C!!!君もそう思うだろう」

彼は、彼女に笑顔で話しかけチェインソーを持って近づいて来た。それを見た彼女はしりもちをついて後ろにさがる

「いやー来るな。マオ！お前は……」

トン

背中に何かがぶつかった

「……お前は！」

「やゝC・Cまた会ったね。君には面倒かけられたし僕の物を何人も殺したからね。その報いだよこれは」

ありえない光景がそこにはあった。

！」

「本当？」

「本当だ！だからやめてくれ！」

「しようがないな。C，Cがそこまで言うなら。はい」

と言つてチェーンソーをV，Vに渡しす

「僕には関係ないからね思う存分にやらしてもらおうかな」

それを見たC，Cはいつの間にかに縛られていることに気づき身動きが取れなかった

そこに近づくマオ

「C．C綺麗だよ。僕と一生一緒にいてくれるんだね」

と言いながらC，Cを抱きしめ、目を閉じられないように手で開けさせた

「やめろ！V，Vやめてくれ！」

そう言われながらV，Vはチェーンソーを振り上げて

「さようなら呪われた王子さん」

「やめろ~~~~~」

続く

死人の復活！後編

「やめろくらくくはあはあ、」

彼女は棺の横で寝っていた。

「何だったんだ。今のは夢は」

その場で少しの間うずくまっていた。

恐ろしいさのあまり動けなくなっているのだ。

『なんであんなのを見た？・・・見るなら・・・ルルーシュ・・・』
そんな事を思いながらうずくまっていた。

「C・C」

自分の名を呼ぶ声がした。

声が聞こえた方向を見た。しかし、聞こえた方向には棺桶しかなかった。

「空耳か。ここのところどうかしているな。今更どうしたというのか・・・誰かいるのか？」

と言いながらも気になり立ちあがろうとした。

「C・Cいるのか」

という声が近くからまた聞こえ立ち上がり周りを見たが誰もいない。

「C・C、よかった。いてくれたのか」

と下から聞こえ下を向いてみると

「!?ル、ルルーシュ!!!」

驚きのあまり思わず彼女は

「C・C?どうして隠れてるだ」

棺に隠れるようにしてしまった

「なっ、なんでもない。それよりお前、なぜ生きてる!」

棺のふちから顔を出しながら彼女は彼を見ていた

「なぜだろな?俺は殺されるはずだったのにな!それでゼロレクイエムが完成し世界は幸せに出来たのにな」

「お前わ、どうして・・・死んでもなお・・・相変わらずだな」

と言いながら彼を抱きしめた

「なあ！C・C!?!どうした!」

「このままでもいいさせてくれ」

「……」

それから数分後

「…C・C…すまないがもうそろそろ」

「あつあくすまない」

グス

彼女が涙を拭き顔を見せた。

「心配かけたな」

「何を言ってる!お前が死ぬのは予定どうりではないか。」

「それはそうだが」

「それ以上にお前がなぜ生きているのかを教えて欲しいものだ」

「それはもうわかつているだろ」

「なに!？」

「何って?お前な、ふざけているのか?」

「?」

「おい…C・C…俺とお前は同類の不老不死の体になったというぐらい理解できるだろ」

彼女の反応がいつもと違う。

「あくそうかなるほどな」

「お前なくく、ふざけているのか!」

「…ああ当たり前だろ。私がお前のこと…(棒読み)」

「あく分かった、分かった。C・Cお前にもわからないことがあるんだな。」

「うっ……」

「まあいい」

彼女が彼女の頭に手を置き

「悪かったな。C・C」

「なっ、何をいまさら謝っている。やはりお前は、童貞だな、いや馬鹿だ馬鹿」

「…C・C・C?いきなりどうした?」

「C・Cと呼ぶな。お前は、私の本名を知っているだろう」
「……………」

ポン

彼女のデコに手を当てた

「熱はない」

彼の手を退けた。

「いや、完全に熱があるだろ。お前からそんなことを言うとは思えな
い」

「いや、私はい・じょ……………」
バタリ

「C・C！おいC・C！！」

続く

病は人間だから

晴れていた空から雨が降り出した。

その空模様の変化をルルーシユは眺めていた。

『これだと来れないな。』

と思いつながら倒れたC・Cが寝ているベンチを見た。

『魔女であっても元は人間か。疲れもたまるか』

微笑み彼は思った。

そして彼女のいるベンチに向かいだした。

それから数分後

「うっ、うっくん。私は、うっ！頭が痛い」

「気づいたかC・C」

「何があった？」

「いきなり倒れたんだよ。まあただの疲れで出た熱だろ。ここ所忙しかつからなその疲れだろ。しかし、魔女ともあろう者が疲れで倒れるとは聞いてあきれんな」

彼は、あきれたように言うがそれが嬉しくもあった。

「そうか。そうだな。私も元は人間だ。不老不死になろうとも人間の体である限り疲れはあるようだな」

「・・・「ようだな」か。ということは魔女にすらわからないことがあるということか」

「何を言っている。当たり前だ。私は神ではない。長く生きようが経験のない事は知らない。だからお前が生き返った理由も私は知らない。それだけだ」

「なるほどな」

「そういうことだな。でルルーシユ、この状況の説明をしてもらおうか」

「いやそれについては、後で話そう。今はこれからの事についてを考える」

「この童貞が私を焦らすとは、テクニックを覚えたな」

「そこで童貞は関係ないだろう。それにまだ確定した・・・」

「はいはい。童貞君！その話は彼らが戻ってきてから一緒に聞くことにしよう。」

「童貞はやめろこの・・・まあいい。言い争ってもどうしようもない。」

そう言いながら諦めながらため息を吐いた

その言い合いをしていた彼女は笑っていた

「それでこれからどうする？」

「そうだな。俺は、ゼロレクイエムの予定では、あのまま火葬にされるはずだったな？」

「で私は自分の気が向くままに行く予定だった」

「そうなる予定だったが、現状はCの世界に1番近い人間になり死ぬ事は出来ず一生この世界の行く末を見ることになったか」

「そうだな」

それから彼がこれからについて考え出し沈黙が続いた。

そして沈黙の時間を止められた

「・・・ルルーシュ」

「なんだC。C」

「では、私と世界を回らないか」

「世界？」

いきなりの彼女の発言に少し驚く

「そうだ、世界一周だ」

「・・・バカを言うようになったなC。C、俺は悪逆皇帝という名が世界に」

「お前は、死んだ、日本の都市の真ん中で民衆の面前でそして全世界生中継ニュースに堂々と出てゼロに殺されたのだぞ」

「・・・フウ！そうだったな。自分は何故か今生きてるからそんな大事な事を忘れてたよ」

と言って笑い出したルルーシュそこで

ドン

扉が開いた

「!?」

「!?」

続く

民衆の声

「ここに悪逆皇帝がいるはずだ探せ！」

「ゼロがこの教会から出てきたのを見たは！」

「どこだ！ルルーシュ！探せ!!」

「ブリタニア皇帝を許すなあいつを普通に埋葬などさせるか」

「そうだ！あいつは今まで何をしたか忘れるな！」

「探せ！探せ!!」

教会の近くにある町から民衆が流れ込んできた

「いきなりなんなんですかあなたたちは？」

C・Cが民衆の前に立った

「どいてくれC・Cさん。ここにルルーシュがいるんだろう」

「あいつは悪魔だ。あいつを火炙りにしてあの世に送ってやるんだ！」

「そうだそうだ！」

「C・Cさんどいてくれ、あんたに止めることできね！俺たちは本気だ！」

「死んだ人間を弄ぶなどしていいと思ってるのか？」

C・Cはそれを制止させようというが

彼らは止まらないルルーシュを探す

そして一人の男が棺の中にいるルルーシュを見つけた

「いたぞ!!!」

「連れてけ全世界にこれから起きることを見せるんだ！」

素晴らしい棺の中から引きずり出されたルルーシュは外に連れて行かれ大木に縛り疲れた。

「やめろお前……」

止めようとしたC・Cは口を抑えら体を押さえ込まれてしまった

「よし、回せ！」

……

スザクがナナリーを迎えにアツシユフオード学園に来ていた

「ナナリーお待たせ！大丈夫かい？」

「……大丈夫です。スザクさ……ゼロ」

「今は咲世子さんとナナリーだけしかいないから気にしないでいいよ」

「そうですか。それでは早くお兄様のもとに行かせてください」

「そうだね。もう少ししたら雨が止む予定だからそしたらすぐにいいよ」

と言った瞬間その部屋に備え付けられたTVがついた

『全世界のルルーシュに虐げられた民衆の方々！見ろこの光景を！悪逆皇帝はゼロに殺された！その死体がこれだ！』

それを見たスザク達は驚く

「スザクさんこれはどういうことですか！」

「なんで！嘘だ。誰もあの場所のことは知らないはずなのに」

『これよりこの死体を我々は焼却する！見よ空を！先ほどまで雨が降っていただが天も味方をしてくれた！奴をこの世から消炭にせよと天からの声だ。みんな！平和のために憎しみをこいつに集めるのだ！明日を迎えるために！よりよき世界へ一歩進むのだ』

と言った瞬間周りの者たちが

ウオオオオオオオオオオ

と声をあげた

「いやーやめてお兄様にもうひどいことをやめて」

とナナリーは画面に向かって懇願したが画面に映っている男が

「やれ!!!」

と号令を言う

ルルーシュが縛れた木に向かって火が投げ込まれ燃え上がってる。

「いや~~~~~~~~」

「嘘だ！ルルーシュ……すまないこんな事になるなんて！」

と膝をついたスザク

燃え上がる光景を見ていた男が

『これでこの世界は浄化された！世界中の人達よ！あえてもう一度言わせてもらう。明日を迎えるために！よりよき世界へ一歩また一歩と行くのだ』

「……………スザクさん、向かいましよお兄様のもとに」
「え……」

「お兄様は生きています！」

続く

兄弟の絆

「えっ？生きている？ナナリー？ルルーシユは僕が殺したんだよ。」
彼はナナリーを「えっ？生きている？ナナリー？ルルーシユは僕が殺したんだよ。」

「生きているというのは語弊かもしれませんが。行けばわかると思います。ですので連れて行ってください！お兄様のいるところへ！」
「あっうん」

ナナリーの勢いに負けさつきまで悲しみが消え去りスザクはナナリーを教会へ連れていく準備を始めた。

「咲世子さんも一緒に行きますか。」

「私はまだやる必要がありますので後ほどお伺いします。」

「わかりました。待っていますね」

「はい」

二人の会話が終わったところで

「ナナリーいくよ」

「はい」

二人は咲世子をおいて出て行った

.....

火は燃え上り燃やされているルルーシユの体が見るみるうちに溶けていき骸骨になっていった

それを見ていた民衆は喜びの声をあげながら去っていく

その様子を見ていたC・C

「終わったな。全てがこれでゼロクイエムが完結する。なっ！ルルーシユ！」

と言いながら燃えている場所を見たそしたらその中から

「そうだなこれで終わる全てが明日のために生きる平和のために」

火の中から淡々と何事もないように裸のルルーシユが出てきたが

「がっ！熱！火を消せC・C！山火事になる！」

「フッ！ハハハハハハ」

C・Cがその様子を見て笑い出す

「何をしている！早く火を消せ！」

焦るルルーシュ

すぐさま火のそばを離れ教会の近くにある井戸で水を汲んで自分にかけた

そうしてる間にC。Cは火を消し始めた

「全く予定が台無しだこれからどうするか」

「何を言っている予定どうりじゃないか。お前が焼かれるのは」

「くっ！そうだ俺が死んだ後スザクには悪いが俺が火炙りになるように人員を配置していた。そうすれば明日への一歩が確実に行くと思っただが……」

「おめでどう！二回目の死が火炙りでの死とはな」

「誰も俺が生き返るなど思っていなかったんだ。こうなることだったらもつと違う方法を考えている！なぜこんな時代に魔女狩りのように生きたまま殺されなきゃいけないだ」

「見てて笑いをこらえるのが辛かったよ！」

「この・TV中継中にADみたいにカンペ持って台本を見せてて楽しんでる奴が」

「フッフフ。いや楽しかったよ！こんなに面白いものがあるなんて知らなかったよ」

満面の笑みで笑っていたC。C

「……もういいこれ以上言ってもやってしまったことだからな。もう過去のことを振り返るのをやめ……まずいな」

C。Cの顔を見て何も言えなくなり止めようと思ったところでこれからまずいことになることに気づいた

「どうしたルルーシュ。そんな死ぬことを覚悟したような顔をして」

「もう死にたくないのだが。諦めようそれよりさっきの続きをしよう」

「うん？これからについてか」

「あくそうだ」

「わかった」

続く